

19 松堂高盛と曹洞宗

著 者 岡本 春一

松堂高盛の生まれたのは、室町時代の初期で応仁の乱の起こる 30 年程前です。動乱の中で厳しい生涯を送る事になります。応仁の乱は都だけでなく、この遠江地方にも地獄の様相を見せます。その様相は松堂高盛自身の著した「松堂語録」に依って明らかになります。

松堂高盛は永享 3 年(1431)に市内原田の寺田村に生まれます。永正 2 年(1505)75 才で当時とすれば長寿の生涯を閉じます。祖父は道印と云い藤原の姓を名乗っていたと云いますから、単なる田舎の百姓ではない。一説によれば原氏の一族寺田氏とも云われ、地域に何等かの力を持っていたと想像されます。この土地が寺田、寺島と云われている様に、寺院に関係していた事は少なくとも地名が作られた「太閤検地」以前に、この地名が一般的に呼ばれていた必要が有ります。この土地は地域の人は承知の如く、長福寺に次ぐ「円通院」が存在していた事から、地名が付けられたものと思います。

この祖父道印は孫の高盛の素性を見抜いて、この息子は他の子供と比べて何か魅力が有から。是非とも徳の高い僧侶に預けて学問を充分受けさせ、地域に役立つ人間にしたいと考えます。

鎌倉新仏教の曹洞宗は越前曹洞専修道場である、永平寺が道元に依って開かれると、如仲天閻などの優秀な僧侶が集まります。遠江国には新しくその教線を伸ばそうと、如仲天閻が進出して森町大洞院を創建します。天閻は将来を見据えて原田に大輝靈曜を派遣して円通院を創建します。こうした事から道印はその徳を慕って松堂高盛の将来を大輝靈曜に託する事にします。単なる口減らしに寺の小坊主に預けたのとは訳が違います。

高盛は祖父の期待に添って 6 才の時大輝靈曜和尚の元に小坊主として修行に入ります。靈曜も他の小坊主と比べて自ら寸暇を欲しんで勉学に努める姿勢に目を止めます。そして期待を掛けます。

文安 2 年(1445)高盛は 15 才になり、剃髪して正式に僧侶となります。名前も「松堂高盛」と正式に名乗ります。そして之を見届けたかの様に恩師大輝靈曜はこの年 4 月 4 日に亡くなります。その後を二代目古山崇栄和尚が引継ぎます。高盛は侍者としての地位に就き修行を欲しみなく重ねます。

高盛 21 才の春がやって来ました。古山和尚も先師以来の学習意欲に惚れ込み、また高盛の自身の強い決意に依って、この時代に名を轟かせた関東の足利学校への入学を勧めます。

今一つ松堂高盛はなぜ足利学校を選んだのか？。本山でもある越前の永平寺でも良かったと思われそうですが、10 年前「永享の乱」が関東で起こり、今川範忠の軍に原氏も従軍します。足利荘の快元和尚の元に足利学校が再建され、高度の勉学がなされている事を知って、原氏一族の中からも此处で一段と高い学問を受けさせようと思い、松堂高盛に白羽の矢を立て選ばれたのではないかと推測します。

足利学校は栃木県足利市に設けられた学校で、第一期は平安時代天長 9 年(832)に創建さ

れます。日本の古代は漢学と儒教文化圏に属していたから、外交的にも漢文、儒学が積極的に採り入れられます。従って詩文に優れていた小野篁が淳和天皇の勅命に依って、関東に足利学校(下野埜州学校)が創建され、優秀な人材を育てる学問所が創建されます。

第二期は室町時代永享 11 年(1439)足利荘を管理していた、関東管領上杉憲実が鎌倉円覚寺の僧快元和尚を招いて再建します。快元和尚は漢詩、書、礼、史書に精通し易学も重んじました。快元は唐の国に入国して勉強しようとして関東を立ち、九州に入り大宰府天満宮に参籠しました。此处で夢枕に「春秋五事」を伝えよとお告げが有り悟りを開きます。従って入唐せず帰国をして儒学を解き仏教を修め融合調和を図り、学問や文芸にも発展させて行きます。

快元は足利学校の中興の祖として大きく力を伸ばして行きます。特に易学に通じ算木を用い筮竹を用い易经に基づき吉凶を占う術に精通します。そして平安時代には陰陽師が、室町時代は儒家や僧侶が用い、軍事占いにも活用します。

中世の足利学校の教場は儒学、漢学、国書等であったが庠主が鎌倉五山文学の出身で有ったから、自然に仏教の分野も盛んに研究される様になります。16 世紀に来日したイエズス会の宣教師に依ると、足利学校は日本で最高の学舎であると教団に報告した程に有名になって来ます。

第三期は江戸時代で、徳川家康は慶長 7 年(1602)以来、庠主は徳川幕府の任命制に変わります。そして運営料として朱印 100 石が与えられて引継がれます。授業内容は仏書、儒学、兵学、医学、漢詩文等となります。

再び松堂高盛に焦点を当てます。松堂高盛は室町時代この足利学校の第 2 期目が発足して、その名が全国に知れ渡った享徳元年(1452)21 才の若き青年僧として入学します。入学と云う事は多額の費用が掛かる。古山和尚は高盛の素晴らしい才能と、時代を背負って地域に根付いて間もない曹洞宗の発展と、寄与に期待を掛けて送り出します。更に原氏の後援も有ったはずで、当時の学問所から見れば今の東京大学に入学するのと同様な素晴らしい事で、高盛は期待を背負って足利学校へ入学します。

足利学校では先に見た様に儒学、漢学、漢詩、易学等々、足利学校を再建した第一世快元和尚の元で、創立の熱い学校方針の元で高等の学問を受ける事になります。そして 6 年間ミッチリ勉強をして修行を終えます。そして松堂高盛は長禄 2 年(1458)27 才の夏に原田の円通院に帰って来ます。円通院は当時とすれば長福寺と肩を並べる大きい寺で、溪谷一円に寺院が展開されていたと思われます。現在は長源庵と云う小寺になっています。

そして何よりも松堂高盛が他の僧侶と比較して優れていた事は、

- 1、足利学校で学んだ数多くの僧侶の中で、「語録」(松堂語録)を書き残したのは僅か 15 人のみで、高盛和尚はその中の一人である事です。優れた教育を受けた意欲と証拠として「松堂語録」が今に残り、高い評価を受けております。それだけのバイタリティーのある優れた人物であった事が之に依って証明されます。
- 2、そして曹洞宗の開祖である道元禅師は、ひたすら打座と云って座禅をする事に依って道を開くと云う教理であったが、松堂高盛は更に易学の勉強に依って、宇宙の理学を採り入れ「機関禅」を採り入れた事も、足利学校で学んだ大きい成果の一つで、自己の主張の中

に採り入れたことです。

- 3、そして松堂高盛の活動の主流になったのは、戦国時代に於ける思想を明らかにした事で、宗教と戦乱に依る実社会をしっかりと捕えた事です。明応3年(1494)

8月中頃、北条早雲は勝誇る配下の軍勢、数千人を率いて遠州に雪崩れ込み、原氏の居城を落とし入れ多数の将兵を殺戮し、民家を焼き払い松堂高盛の居る円通院や長福寺も焼き払われてしまいます。松堂自身も暫く河勾荘に避難しました。この戦乱の事は「松堂語録」にも記されている様に、「野夫は頭を叩きて差怨し、俚婦は児を抱きて逃げ去る。餓死者は道に満ち、窮死は記すに耐えず…」とこの世の地獄の様相を伝えています。この中にあっても松堂高盛は、少しでも民衆の力になればと、宗教の力に依って民衆の社会生活の安寧を図り、自ら各地を廻って実践をした事です。

- 4、そして戦乱の中に社会の在り方を説く、教育の大事であることを身に浸みて感じ、文明2年(1470)夏に円通院で江湖会を九旬の長期会に渡って開きます。数十人の僧侶に足利学校で学んだ「碧巖録」の講義(曹洞宗・臨済宗の根本を説く)や漢学を欲し味なく教授したことです。これらは独り僧侶の世界のみに留まらず、其の他の檀徒の武士や子息、一般檀家の人達にも自ら機会を作り、高盛が高説を説いて廻り、精力的に新しい文化の浸透に努めた事です。

- 5、天池の災いの祈願では、明応7年(1498)8月25日辰の刻(午前8時)震度8.4、明応の大地震が発生します。遠江国は大被害を受けます。「松堂語録」に依れば「万民肝を無くし、或は地に倒れてほふくし、或は柱を抱きて滅するを待てり。老翁は合掌して仏の名を念じ、幼弱は叫喚して父母を号せり…」と云う。更にこの大地震は大津波を引き起こし、浜名湖は今切れ口が決壊したり、沿岸各地の海岸や河川周辺の地域は、多数の人達が波に飲み込まれて死者を出します。そこで高盛は「天災は人災である」と、今迄の言伝えを生かさなかった事から、「自ら行ないを正す事で救われる」と先人の教えを説いて廻ります。

- 6、また池田荘では雨乞いにも依頼を受け、110人の民衆の前で足利学校で学んだ、易学に依る呪術も多分に採り入れ祈願を試みて成功しています。また北条氏の侵略で民衆の動揺は最高に達していたが、こうした人々に対応する説教も各地で行い、宗教の教えも説いて廻ります。

- 7、葬祭の在り方も改善して行きます。人々に対して禅を通じてその真理を説いて歩きます。民衆の欲求する呪術的要素や易学も取り入れます。そして死者に戒名を与える事に依って、死者の名誉を忍ばせ身分の上下を現わします。更に僧侶の合葬に依って樂器を用い、祈禱的に極楽浄土へ送られる様に改善工夫をします。

- 8、文化の交流に関しては、得意の漢学や漢詩を披露してその詩の心を共有する様に、欲し味なく各地を廻り交流を深めています。地元の原氏を始め藤原氏を名乗る森の天方氏、見付府で勢力を伸ばしつつある斯波氏、鎌田明神社の神主、天台宗医王寺の住職にも講義をした事が「松堂語録」の所々に見受けられます。

- 9、この様な松堂高盛の積極的な布教活動に依って、曹洞宗は遠江国の各地に広まり発展します。何よりも遠江地方の7割近くが曹洞宗寺院で有る事はこうした高盛等の教線強化の現れとも思われます。鎌倉新仏教の新たな教えが松堂高盛を始めとする僧侶に依って、仏

教の庶民化が一般庶民の生活の中に大きく浸透し、身近な存在となって行きます。

日本の宗教を振り返って見ると、天台宗と真言宗の二大宗教に依って根付きませんが、奈良平安時代は密教で貴族宗教と云われる様に、貴族庇護の元に発展したもので、一般庶民とは馴染まない存在でした。

天台宗は延暦 24 年(805)最澄に依って、中国より日本に伝えたもので、比叡山を中心に貴族の庇護を受けて発展します。真言宗は空海(弘法大師)が同じく延暦 24 年中国の密教を学び、高野山金剛峰寺に根本道場を作り発展します。

平安時代はこの二大宗教が貴族の庇護の元に発展し活躍をします。「この世をば我が世とぞ思う望月の欠けたる事も無きと思えば…」と、我が世を謳歌した藤原道長時代を過ぎると、相次いで天変地変が起こります。そして武士の台頭等に依る争いで都は焼き討ちに合い、民衆の動揺は一層激しくなり不安が募って来ます。

そして中国伝来に依る仏教の力の及ばない「末法思想」と一致して来た事から、この世の中の終わりを告げる様相となります。貴族も庶民も共に悲哀にくれます。

しかしこの殺伐とした不安の世の中から一抹の新しい光が見えて来ました。阿弥陀如来が現れ御すがりすれば、誰でも西方娯楽浄土に行けると云う浄土思想が広まります。浄土教は法然に依って「南無阿弥陀仏」の念佛を唱えれば、誰でも極楽浄土へ行けると云う分かり易い教えが順次広がり、新仏教の庶民化が進んで来ます。

そして更に仏教の庶民化が鎌倉時代に入ると進みます。古代仏教に対して一大改革運動が起こります。法然上人に依る分かり易い浄土教の教え、その弟子親鸞に依る信心の教義を以って伝道布教を行なう思想、一遍上人に依る時宗、禅宗の栄西禅師の教えによる臨済宗、道元上人の教えに依る曹洞宗、日蓮上人に依る日蓮宗の新しい六宗派が生まれます。こうした古代宗教の厳しい弾圧の中で、庶民仏教の鎌倉新仏教が順次広まって行きます。

鎌倉新仏教と云われる曹洞宗も道元禅師に依って開かれます。松堂高盛の書かれた「嗣書伝記」が原谷の長福寺に残っています。先般全般を読ませて頂きました。之は松堂高盛が足利学校で学んだ教理を追及する中で、高盛が今の様に印刷技術が進んでいない時代、ひたすら書き記した事で仏教伝来の経緯と曹洞宗のエキスを、長福寺に在住の時代に書き残したものです。現物はこれを江戸時代に書き写したものです。

之を見ますと江戸時代の中頃、寛文 4 年(1664)長福寺の松堂高盛より数えて 8 代目後の靈天和尚が、長福寺に代々伝わる「嗣書伝記」が虫食いで、解読が困難になって来たから(防虫剤の無かった時代)、書き改め古い「嗣書伝記」は祖師の墓の前で焼却したと記されています。今から百数十年前を逆算して見ると、安政の大獄のあった時代です。今残っている古文書の大半は江戸時代の後半の物ですから、相当虫食いの有った事が伺われます。

「嗣書伝記」はその寺に代々伝わる宗派の秘密と由来を詳細に書き記したもので、各寺院は何よりも大切に引継がれて来たものです。

「嗣書伝記」と云うものは、各寺院は何よりも大事に受け継がれて来た。これを引継ぐ時に古き時代は、指の血や舌の血を以って血判を押し、儀式は袈裟を相続し、松枝を相続し、ホッスを相続し、「優雲華」(3 千年に一度咲き金輪王が現れる龍舌蘭?)を相続しています。

この長福寺の「嗣書伝記」は曹洞宗を開いた、道元禅師が中国天童山を始め各寺院で修行し、各寺の「嗣書伝記」に於ける曹洞宗に到る数々の物語が書き記されております。天童山の「嗣書」は地は白絹、表紙は赤錦で長さ 7 尺余で七仏より始まり、臨済に到る 47 師が一円の中に記されていた。道元は更に台州の雁山寺に修行して達磨大師の流れを汲む「嗣書伝記」に出合います。開祖から五祖が梅の五輪に書かれていた。曹洞宗のシンボルが梅の花であるから、道元の修行が完結に近い事が伺えます。

各地の数々の修行を積んだ道元は再び天童山に戻り、如浄和尚より禅問答を行ない、禅問答の中で禅の極意を悟ります。安貞元年(1227)4年間の修行を積んで日本に帰国します。山城国で曹洞禅の布教を行ないます。寛元元年(1243)越前の国の地頭波多野義重に招かれて永平寺を開創します。そして此处に集まった優れた僧侶に依って、曹洞宗は全国各地の戦国武将の庇護を受けながら、日本全国に広まって行きます。

松堂高盛はこの「嗣書伝記」の中で、中国宋の時代の僧侶で禅道を追及した優れた僧侶を紹介しています。義青和尚、道偕和尚、如浄和尚等 3 人の禅僧は、中国の時の皇帝よりその功績が認められて、僧侶として最高の「紫衣」や「禅師」と云う位を授けますが、何れもこの 3 人は之を受取らず辞退をしております。従って墨染めのお粗末な衣を着て庶民と共に生涯を送っています。

松堂高盛自身も長福寺、最福寺の再建に関わり、「松堂語録」を書き記し、遠江国各地の曹洞宗寺院の創建に係わり、素晴らしい功績を残しました。従って曹洞宗の長老として、安穏として長福寺で余生を送っても良いのに、自らは後輩に寺を譲って、最後は朝比奈の閑田院でひっそりとした余生を送ります。

松堂高盛のこうした功績と、修行の跡を振り返って見ると、先に見た中国の 3 人の高僧と同様に共通点がある様に思われます。松堂高盛は自己の功績を誇張したり、鼻に掛けたり権威をチラつかせる事無く、戦国時代に於ける庶民の恐怖心を取り除き、荒れ果てた古里の中に在って庶民の生活の中に入り込み、曹洞宗の分かり易い教理に依って、安心と安全そして社会に在るべき姿を説教し続けた結果として、遠江国の寺院の約 7 割が曹洞宗に改宗したり、新しい寺院が創立します。

之は他の地域では見られない事で、松堂高盛の布教の力が如何に大であったかを物語っています。地域の有力武将原氏や地主とも取組、その庇護を受けながら、一般庶民とも分け隔てなく取り組んだことは、松堂高盛が足利学校での勉学の中で開花した、悟りでは無かろうかと私は思います。そしてその事実は松堂高盛が自ら著した此の「松堂語録」と云う中身を、充分読み砕く事に依って明らかになると思います。